中丸貴史

日本古典研究の〈戦後〉
−国文学と漢文世界−

はじめに

近代国民国家と密接にかかわって成立した「国文学」は、日本の文化的アイデンティティを担うために異質なものを排除して、その純化を図った。ここで排除されたのが東アジア共通の知的基盤であった「漢文」であった。これは1945年の敗戦という、明治時代以来の思想的枠組みが相対化されてもなお、その命脈を保ち続けている。大学のいわゆる「国文学科」（あるいは日本文学科）で扱うテクストが、『源氏物語』や『枕草子』などの仮名テクストに偏っていることがその証左である。

一方で、1900年に敦煌（Dunhuang　現中華人民共和国甘粛省）文書が発見され、日本でも江戸後期の森立之（1807-1885）らによる『経籍訪古志』以降、中国本土では現存しない、宋版以前の本文をもつ唐鈔本と、その転写本である旧鈔本が注目されつつあったが、敦煌文書にいち早く注目したフランス人ポール・ペリオ（Paul Pelliot,1878-1945）とも交流のあった中国人羅振玉（Luo Zhen yu,1866-1940）らがこの日本残存の唐鈔本の研究を進めた。19世紀末から20世紀初頭にかけて東アジア漢文文化圏[1]の東西の極地で漢籍をめぐる共通の現象が確認されたわけであるが、こうした研究を「国文学」は一部を除いて積極的に取り入れようとはしなかった[2]。

冷戦終結後、国際化・グローバル化の波は「国文学」の世界にもおしよせ、「国文学科」から「日本文学科」と看板の掛け替えを行なった大学が相次いで現れた。また90年代以降は「東アジア」をキーワードに多くの研究が進められつつあるが、「国文学」の質的転換にはまだ至っていない。

[1] 「漢文文化圏」の語は金文京『漢文と東アジア—訓読の文化圏』岩波新書、2010年による。

[2] 日本文学と敦煌文書との関係については早くから注目し研究を進めてきた人物として川口久雄がいる。『西域の虎—平安朝比較文学論集—』吉川弘文館、1974年、及び『三訂　平安朝日本漢文学史の研究』上中下、明治書院、1975-1988年など。

日本文化は、漢文文化ならびに和文文化との二重構造を有し、同時にこれらの融合したものである。論者は漢文と和文の中間テクストともいえる日本漢文を中心に研究を進めてきたが、本稿ではその意義の確認と、今後の展望について述べてみたい。

1 国文学 national literature

徳川幕藩体制に終止符を打ち、西洋を模範とした近代国家をめざした明治政府は、これまで藩に属していた人々を、天皇を中心とした国家の民＝国民としてまとめあげようとした。近代国民国家（nation-state）日本のために必要とされたのがナショナルアイデンティティ（national identity）であり、その形成のために「国語（national language）」と「国文学（national literature）」がつくられたのである。その国文学の歴史が「国文学史」であり、1890年（明治23）には日本で最初の文学史である三上参次・高津鍬三郎による『日本文学史』（金港堂）や芳賀矢一・立花銑三郎『国文学読本』（冨山房）が相次いで刊行された。品田悦一は「一八九〇年という画期」と呼び、前年の大日本帝国憲法発布を受けて最初の帝国議会招集、教育勅語の発布と、日本の近代国家の体制の確立した年にこのような書が刊行されたことの意義を指摘している[3]。

三上参次・高津鍬三郎『日本文学史』では、歴史にも世界史と各国史があるように、文学史にも世界文学史と各国文学史があり、「文章詩歌は、最も能く、人の思想、感情、想像をあらはすものなれば、人間の発達を知るには、此上なき材料なりとす」として、文学とその変遷を知ることの意義を述べている。しかしこうした文学の歴史もどこの国でも良いものがあるかというとそうでもなくて、わが国（日本）の場合は隣国中国と同様、決して貧しいものではない、つまり日本にはきちんとした文学史が存在するのだ、と表明するあたりに、却ってその屈折した感情を読み取ることもできよう。国文学については「一国民が、其国語によりて、その特有の思想、感情、想像を書きあらはしたる者なり」と定義している。

1899年（明治32）に刊行された芳賀矢一の『国文学史十講』（冨山房）では、「国民の思想、道徳、感情と云ふものが其国文学の上に反映されて居ることが大切」であり、国民の内面を知るためには文学の歴史を知るのが一番よいと述べている。このあたりの考え方は先の『日本文学史』と同じものである。重要なのは次の箇所であろう。

> 我国は太古から、建国数千年の久しき、少しも外国の侵略を受けたことがない。万世一系の天子様を戴いて、千古不易なる国語を話して居ります。漢学や仏学が這入つて来て、漢語、仏語が混つたり、文法上の構造が多少変つたりする

[3] 品田悦一『万葉集の発明　国民国家と文化装置としての古典』新曜社、2001年、61-62頁。

のは時勢の変遷で、自然のことでありますが、日本語はどこまでも日本語です。かやうに数千年来、代々相続いて、日本語を話して来て、其日本語で綴つた文学が今日吾々の手に残つて居るといふことは如何にも貴い幸福なことです。一国の文明は其国民が造出すものであれば我国民の思想感情の変遷を現した文学史の裏面には世界に特殊なる我国民の歴史が認められる事であります。文学歴史の必要なことはもとより論を待たぬことでございます。

以上を、虚妄であるとして排除するのは簡単であるが、ドイツ文献学を取り入れ、国文学の方法論を確立した芳賀矢一がなぜこのようなことを書いたのか、書く必要があったのかを考えるべきである。一方で現代の常識からすれば「建国数千年」でも「万世一系」でも、国語が「千古不易」であるはずもない。これらはすべて日本という国家が太古以来、純粋な民族的伝統を保持してきたという幻想とでもいうべきものであり、雑じり気なしでなければならないという自国の文化を特権化する、国家のアイデンティティにかかわる問題である。ここには「日本文化」の名のもとに、異なる他者を排除する思想が垣間見られる。明治時代に形成された国民国家と同様、「国語」「国文学」が制度として形成される過程を見ることができるのである。

さて、『国文学史十講』においては第二講以降、時代を追って文学史が説明される。次にあげたのは、上古文学と中古文学の見出しにあげられているテクストである。

上古文学の一　記紀の歌、祝詞
上古文学の二　人麿の歌、山部赤人、万葉集、古事記、風土記、宣命
中古文学の一　神楽歌催馬楽歌、六歌仙、伊勢物語、竹取物語、紀貫之、古今集の歌、土佐日記、後撰集、拾遺集
中古文学の二　大和物語、住吉物語、落窪物語、とりかへばや物語、うつぼ物語、紫式部、源氏物語、紫式部日記、清少納言、枕草子、栄華物語、大鏡、今昔物語、後拾遺集、今鏡、朗詠

ここにあげられているものは、ほぼ仮名テクストで、漢文が排除されている。そして、それがほぼそのまま戦後の国文学、日本文学に引き継がれているのである。国文学から日本文学に看板を掛け替えたとしても中身はそのまま「国文学」なのであった。問題なのは、明治期の「国文学」の生成過程ではなく、その思想的枠組みが今なお、時に無意識的に引き継がれていることなのである。

2 官学アカデミズムと国文学

ここでは、官学アカデミズムと国文学について、国家の制度のなかで国文学がどのように位置づけられていったかを、主として東京大学の制度から見てみたい。

1877年（明治10）、洋学を学ぶ東京開成学校と医学を学ぶ東京医学校を合併して東京大学が設立された。この時、和漢文学科もつくられるが、これは東京開成学校、東京医学校の流れをくむ学科ではない。1871年に廃止された「大学」の流れをくむものであった。当初、明治政府は伝統的な「国学」と「漢学」を「大学校（本校）」として中心に位置づけ、洋学と医学の学校をそれぞれ大学校分局とした。ところが、この大学校において国学と漢学との主導権争いが起きてしまい、結局、大学校は休校状態となり、これが「大学」となったのちにも続き、機能不全に陥ってしまった。そのため、洋学系統の構想により学制改革が行われようとしたが、今度は国学者と漢学者が一致団結して洋学者と対立するに至って、1870年（明治3）に改革を理由に大学（本校）が閉鎖されてしまったという経緯があった。東京大学の設立は、新政府が国学復古の方針から一転して洋学重視の立場に立った結果であるともいえる。

以上のような変遷を経て東京大学の設立と同時に和漢文学科が設置されたのである。和漢文学科は江戸時代からの「国学」「漢学」を受け継いでいたのだが、1885年（明治18）にこれらが分離し、「和文学科」「漢文学科」となった。さらに1889年（明治22）になると、和文学科が「国文学科」と「国史学科」になる。この年は大日本帝国憲法が発布された年である。近代国家としての制度が整った年に、「国」文・「国」史が形を整えたのは大きな意味があるだろう。先に見た『日本文学史』が刊行されるのはこの翌年である。

なお、和漢文学科から分かれた「漢文学科」（のちに漢学科）は、1904（明治37）に支那文学科と支那哲学科に分離するが、完全なる異文化ではなく自文化の一部であるという意識のある「漢文」という言葉を外して「支那」としたのは、これらを「外国」のものとして位置付けたからにほかならない。1904年はまさに日露戦争のさなかであったが、1894年の日清戦争に勝利し、それに引き続いて大国ロシアとの戦争に挑戦した当時の日本のアカデミズムも、いわば、文化的側面において自文化を称揚し、これまで大きな影響を受けてきた大陸の文化を他者として「外国」として捉えようとしたのである。日清・日露戦争の間に笹川種郎『支那文学史』（博文館、1898年）、久保天随『支那文学史』（人文社、1903年）といった著述が出ていることも注目されるだろう。「支那文学」については笹沼俊暁が「欧米諸国によって主導される近代の世界と「世界文学空間」に参入していこうとするさなか、西欧に近づき近代化を進める日本の文学の方向性の裏で、「支那」の文学が前近代性を象徴するものとして否定的に描かれるというかたちで、両者の分節化と階層化が進められた」と指摘している[4]。

[4] 笹沼俊暁『「国文学」の思想—その繁栄と終焉—』学術出版会、2006年、72頁。

1891年には渋江保『希臘羅馬文学史』『英国文学史』(博文館)、翌92年には同じく渋江の『独仏文学史』(博文館)、1893年には坪内逍遥「英文学史綱領」(『早稲田文学』39-43、46-48号、同年5月～9月)、1907年には、浅野和三郎『英文学史　附録:米国文学史』(大日本図書)、橋本忠夫『世界文学史』(博文館)など、各国文学史の出版が相次いでいる。世界文学史というのもこれら国民国家を前提とした文学史であることは言うまでもない。そしてこれらの各国文学史の出版が国文学史の生成と同時期であることは偶然ではない。自己のアイデンティティの形成には異なる他者の存在が不可欠であり、各国文学史が「国文学史」と同時期に書かれることは必然であった。「国文学」は漢文を排除した和文中心の国民国家のアイデンティティのためのものであり、国家を前提とした文学であった。繰り返しになるが、この枠組みは戦後の日本文学研究にも引き継がれている。

3　リンガ・フランカ(lingua franca)としての漢文

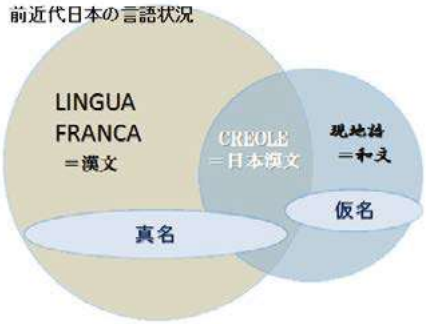
こうした国文学の枠組みを相対化するときに重要なのが、「リンガ・フランカ(lingua franca)」という概念である。リンガ・フランカは国際共通語などと日本語に訳されるが、「異なる言語を話す人々の間での共通語」という点が重要である。東アジア漢文文化圏の中で日本と朝鮮、渤海などそれぞれ別の言語をもつ人々との間で使われたのが漢文であったことを考えると、漢文はまぎれもなくリンガ・フランカであった。

このリンガ・フランカと古典語は大きく重なるところがある。漢文のほかに、たとえば、ラテン語、古典アラビア語、古代ギリシア語、サンスクリット語などが古典語として考えられる。ラテン語が西洋古典語ならば、漢文は東洋古典語といえるだろう。しかし古典語としてしまった場合、古典時代に限定されてしまう。英語などは現代の地球的規模でのリンガ・フランカになりつつあるわけで、前近代のみならず近代以降現代をも視野に入れるというその汎用性から用いるのである。

リンガ・フランカに対して、各地域で使用される言語を現地語とする。たとえば、現代のリンガ・フランカとしての英語であれば、現地語は日本語やポーランド語・フランス語・中国語・ドイツ語・タイ語などの言語が対応し、ラテン語であれば、ポーランド語・英語・フランス語・ドイツ語などが現地語ということになる。同様に前近代の東アジア世界(東アジア漢文文化圏)においては、リンガ・フランカたる漢文に対して、日本はもちろん、朝鮮半島、ベトナムなどの地域で現地語があった。また中国においてもリンガ・フランカとしての漢文に対して現地語が存在していたことは留意されるべきであろう。また日本を含めた漢文文化圏の諸地域において、漢字との影響関係で文字がつくられたことも重要である。たとえば、契丹文字・女真文字・壮文字・西夏文字・字喃などがそれであり、その先にハングルや仮名などが位置づけられる。

以上をふまえてさらに前近代の日本の言語状況について考えてみたい。前近代において日本は東アジア漢文文化圏のなかにあり、リンガ・フランカは漢文であったことは先ほどから述べているとおりである。一方の現地語であるが、漢文に対して和文ということになるだろう。日本語は漢文と和文などが融合して現在に至るので、前近代を考える場合、現地語とするのは必ずしも適切ではないだろう。和文を表記するために使われたのが、仮名である。「仮名」とは仮の文字の意で、それに対して「真名」たる漢字があった。また、リンガ・フランカと現地語の融合した、クレオール（creole）としての日本漢文も重要である。日本漢文は日本人の書いた漢文であるが、「正格」漢文から和文化したものまで幅広い。

以上のように考えると、「国文学」がその主たる対象としたのは現地語たる「和文」であり、前近代の日本が、漢文文化圏に属し、漢文を基盤としてきたことを考えると、一部分しか対象としてこなかったことは明らかなのである。日本文学を世界的な視野で考える場合、世界的な言語文化圏の一つである漢文文化圏という視野が重要であり、日本文学は、漢文・日本漢文・和文という三層構造で考える必要がある。



4 唐（旧）鈔本と日本／敦煌

これまで見てきたように19世紀後半に国文学が誕生し、その思想的枠組みは今もなお強固に存在し続けているのだが、19世紀から20世紀にかけて、東アジア漢文文化圏の周縁部で起きた2つの事象にあらためて注目することで今後の可能性を探ってみたい。

一つ目は敦煌文書の発見である。これは1900年、莫高窟で王円籙（Wang Yuanlu）が大量の文書を発見したことにはじまる。1907年にはイギリスの考古学者オーレル・スタイン（Sir Marc Aurel Stein）が数千点の文書をイギリスに（現英国図書館蔵スタイン・コレクション）、翌1908年にはフランスの東洋学者ポール・ペリオ（Paul Pelliot）が数千点の文書をフランスに（現フランス国立図書館蔵ペリオ・コレクション）持ち帰るという事態になる。こうした敦煌文書の国外流出を重く見た当時の中国政府（清Qing）は1910年、残存文書すべてを政府管轄とし、北京に搬送する（現中国国家図書館蔵）。ところが1914年から1915年にかけてロシア・オルデンブルク隊第2次トルキスタン調査団によってふたたび文書が収集されるという事態が起きている（現ロシア科学アカデミー東洋写本研究所蔵）。こうして敦煌文書は世界中に分散してしまったのである。

敦煌文書は内典（仏書）が中心であるが、これらは4世紀から11世紀初めのものであり、中国中心部ではほとんど残っていない唐（Tang、618-907）以前の写本、つまり唐鈔本を多く含んでいる。それゆえに敦煌文書の発見は重要なのであった。

中国中心部において唐鈔本が姿を消したのは、宋（Song）代に書物の中心が写本から刊本（宋版）に移ったことが大きい。現行の漢籍のテクストはこの宋版に由来する。また宋版は国家事業として行われたために校訂もよいと言われている。中国においては宋版の底本となった唐鈔本は不要になり、急速に消滅してしまった。よって宋代以前の本文を知ることが難しくなったのである。

二つ目は、江戸時代後期における日本伝存漢籍（旧鈔本）への注目である。旧鈔本とは奈良から室町時代（8C-16C）の間に、唐鈔本を日本で写したもののことである。狩谷棭斎（1775-1835）を中心とする考証学の成果で、森立之（1807-85）らによって編集された『経籍訪古志』、1880年（明治13）に清国公使館員として来日し、森に刺激を受けた楊守敬（Yang Shoujing、1839-1915）の『日本訪書志』『古逸叢書』などの成果があり、特に羅振玉は辛亥革命を避け、京都に8年ほど滞在、ペリオとも交流があり、旧鈔本の価値を的確に知り得る立場にあった。『京都帝国大学文学部景印旧鈔本』全10集などの刊行に尽力した。

19世紀から20世紀にかけて、東アジア漢文文化圏の周縁部で唐鈔本（旧鈔本）の「発見」があったことは重要である。というのは平安時代以前の日本は唐鈔本（旧鈔本）によって漢籍を読んでいたのであり、敦煌の唐鈔本と、日本の旧鈔本によって、宋版以前の本文の一端が明らかになるからである。平安時代に読まれていた漢籍の本文が明らかになることで日本の仮名文学の読みも変わってくる可能性がある。太田次男の大著『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』（勉誠社、1997年）をはじめとして、漢文学系の研究者による研究は進んでいるが、日本文学とくに、仮名文学を中心とした研究者の側からの研究は進んでいるとは言い難い。なお、『源氏物語』本文と旧鈔本との関係については、神鷹徳治・静永健編『アジア遊学　旧鈔本の世界―漢籍受容のタイムカプセル』（勉誠出版、2011年）の神鷹徳治による「序論―旧鈔本と唐鈔本」がわかりやすく有益である。

おわりに　日本漢文の可能性

論者は漢文と和文の中間テクストともいえる日本漢文、とくに貴族たちの日記を中心に研究を進めてきた[5]。日本文学において貴族の日記といえば、『土佐日記』『蜻蛉日記』

[5] 東アジア漢文文化圏を視野に入れたものとしては、「『後二条師通記』寛治五年「曲水宴」関連記事における唱和記録　―「劉公何必入天台」を始発として―」王勇・吉原浩人編『海を渡る天台文化』勉誠出版、2008年、「漢文日記叙述と漢籍　―摂関家の日記としての『後二条師通記』―」『日本中国学会報』第63集、日本中国学会、2011年10月、「藤原師通の白詩受容　―『後二条師通

『更級日記』などの仮名日記が想起されるだろうが、貴族たちは一方で漢文で日記を記していた。漢文で書かれた日記は公的性格を帯びるため、また記録の側面が強くあるために、文学研究の対象としてではなく、歴史資料（史料）として、主に歴史学の対象として扱われてきた。しかしながらこうした漢文体の日記は仮名日記をはるかに上回る量が残されており、また近世までその伝統が続いている。文学研究がもはや芸術作品としてのテクストのみを対象としなくなった今、また、たとえ言語芸術作品に対象を限るとしても、テクストは他のテクストとの関係なしに生成し得ないことを考えれば、日本人が書き続けた膨大な量の漢文テクストもその視野に入れるべきであるし、それ自体も対象とすべきではないかというのが論者の考えである。

これまでこうした漢文体の日記がテクスト分析の対象にもならなかったのは、和文＝国文学、漢文＝中国文学といった一国国文学の枠組みからははみ出すものであったというのと、フィクション＝国文学、ノンフィクション＝歴史学といった枠組みも存在していたこと、さらに日本漢文が「和臭（習）漢文」「変体漢文」として、まがいものの漢文として扱われていたためであり、三重に、周辺に追いやられたテクストであったということができる。しかしながら貴族たちによって書き続けられた漢文体の日記が、日本の文化の中心にあった上級貴族たちにとって重要な活動のひとつであったことを考えれば、歴史事実の解明のための資料としてではなく、それ自体を研究対象とすべきではないか。と同時にその文体が、正格漢文ではなく日本的に変容した漢文＝日本漢文であり、それで一つの文体を形成しているということも、リンガ・フランカと現地語、クレオールなどの関係から考えるうえで重要なのである。

平安時代の人々はリンガ・フランカたる漢文を古典として受容し、自らも漢文を書き（＝日本漢文）、また時に仮名文とも使い分けていた。彼らが受容していた漢文は、現在多く残る宋版以降の本文ではなく、それ以前の、唐鈔本の本文であった。よって、日本はもちろん、敦煌などに残る唐鈔本が、平安時代の漢籍を知るために重要である[6]。

日本古典研究にとって、「敗戦」は大きな転換点になるはずだったが、未だに「国文学」の枠組みを引きずっている。しかしながら、「昭和」とほぼ同時期に冷戦も終わり、グローバル化が進んだ結果、「日本」であることが問われることとなり、周囲の環境の変化に対応するかたちで変わりつつある。リンガ・フランカたる漢文は世界的な視野で日本古典を

記』が拓く文学世界—」Tomasz Majtczak [&]Senri Sonoyama『Language and Literary Traditions of Japan』Jagiellonian University Press, Kraków 2014年、「院政期日本の文化的転換—『後二条師通記』から読む「契丹」—」小山利彦・河添房江・陣野英則編『王朝文学と東ユーラシア文化』武蔵野書院、2015年などがある。

[6] なお、本稿に並行して旧鈔本など漢籍の受容について考えた拙稿に「漢文日記に見える『文選』—東アジア漢文文化圏における書物交流の一痕跡—」『史聚』50号記念号、史聚会、2017年4月予定がある。

位置づける際に重要であり、また近代にいたるまで日本人が漢文を書き続けてきたことをより積極的に評価するべきである。日本国内の研究者は分野を横断した視野と協力が必要であり、なによりも海外の研究者の視点は今後さらに重要になるだろう。

主要参考文献

神田喜一郎『敦煌学五十年』二玄社、1960年。
文部省『学制百年史』1981年。
太田次男『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』勉誠社、1997年。
ハルオシラネ、鈴木登美『創造された古典　―カノン形成　国民国家　日本文学―』新曜社、1999年。
神野藤昭夫「近代国文学の成立」『森鷗外論集　―歴史に聞く―』新典社、2000年。
品田悦一『万葉集の発明　―国民国家と文化装置としての古典―』新曜社、2001年。
池田温『敦煌文書の世界』名著刊行会、2003年。
鈴木貞美『日本の文化ナショナリズム』平凡社新書、2005年。
笹沼俊暁『「国文学」の思想　―その繁栄と終焉―』学術出版会、2006年。
東京大学教養学部国文・漢文学部会『古典日本語の世界　―漢字がつくる日本―』東京大学出版会、2007年。
水村美苗『日本語が亡びるとき　―英語の世紀の中で―』筑摩書房、2008年。
金文京『漢文と東アジア　―訓読の文化圏―』岩波新書、2010年。
長島弘明編『国語国文研究の成立』放送大学教育振興会、2011年。
神鷹徳治、静永健 編『アジア遊学　旧鈔本の世界　―漢籍受容のタイムカプセル―』勉誠出版、2011年。
安江明夫「敦煌文書保存の一世紀」『学習院大学文学部研究年報』第62輯、2016年3月。

English Summary of the Article

Nakamura Takafumi

Postwar Research on Japanese Classics –National Literature and the World of East Asian Classics

"National literature" (*kokubungaku*) arose together with the modern national state, and as a building block of Japanese cultural identity, was subjected to cleansing from foreign influences. What was discarded was the "Chinese literature" (*kanbungaku*) – an intellectual foundation shared by the whole of Eastern Asia. Even though the ideology developed during the Meiji Period and was confronted with the WWII defeat, the tendency lingered and continued on after the war. The stress the university departments of "national literature" (or Japanese literature – *Nihon bungaku*) put on works created originally in local syllabic *kana* (instead of in "Chinese writing" – *kanbun*), like *Genji monogatari* (The Tale of Genji) or *Makura no sōshi* (The Pillow Book), give proof to that.

On the other hand the year 1900 brought the discovery of the Dunhuang manuscripts. In Japan, the issue of portions of Tang dynasty texts and their old transcriptions, predating the versions compiled during the rule of the Song dynasty, no longer existing in China, have been brought to light since the publication of *Keiseki hōkoshi* (Bibliography of Chinese Classics), authored by Mori Risshi (1807-1885) among others. However the first ones to notice the Dunhuang documents were the Frenchman Paul Pelliot (1879-1945) and his coworker Luo Zhenyu (1866-1940), who started their research with the Tang dynasty texts preserved in Japan. An increased interest in Chinese classics can be noted at the southeast outskirts of the Chinese civilization area of influence in East Asia at the turn of the 19th to the 20th century. The "national literature", however, partially dismissing this research, did not try to actively incorporate them into the field.

After the cold war, the internationalization and globalization wave reached the world of "national literature" and the consecutive universities went on to change their administrative units' names from "department of national literature" to "department of Japanese literature". From the 1990's research using the term "Eastern Asia" as a keyword is extensive, but this change does not translate into a quality shift in "national literature".

Japanese culture consists of two interconnected layers – Chinese culture and the native culture. The author's area of research is Japanese *kanbun*, an intermediate text of sorts between Chinese and native writing. The article stresses the importance of *kanbun* and organizes the topic of quotations of Chinese classics (bunsen) – the excerpts from Tang dynasty texts (or their transcriptions) – like those that can be found in the diaries of Heian aristocrats, for one example of Japanese *kanbun*.

Keywords: national literature, Kanbun, lingua franca, East Asian Classics.